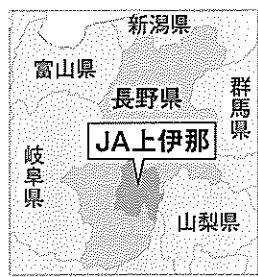




【第2回ゲスト】
御子柴茂樹氏
長野県JA上伊那代表理事組合長

「インタビューとまとめ」
石田正昭 三重大学 名誉教授

JA上伊那は第一回地域営農ビジョン大賞支援部門の大賞(全中会長賞)を受賞。集落営農の育成を柱に農地利用集積を進めてきた。組合員の組織活動をJAの事業活動に結びつける力量は全国屈指。米、野菜、果樹、花卉、畜産と粒揃いの農業を展開している。



農を基盤とせよ、協同の力を発揮しよう

農を軸としたJAづくり

石田 組合長は現在一期末ですね。この地域で、文化的にも経済的にも協同活動の重要性が認識されています。大地主はおらず、家族経営が多かったために、協同組合が発展してきたのだと思います。在村地主層にリーダー的な農家がい

て、彼らが地域を引っ張ってききました。現在約一万七〇〇〇の正組合員がいますが、平均面積は八〇アールに過ぎません。

石田 集落営農も盛んですね。御子柴 その通りです。もともと養蚕の盛んな地域で、龍水社という繭糸販売連合会があって、そこ

相当進んでいます。

WCSは八万円が水田農家に入り、耕畜連携のほうの一萬三〇〇〇円が酪農家に入ります。直蒔きで米を作って、あとの刈り取りからラッピングまでを酪農家がやるので、水田農家の手取りとしてはいちばんいいのです。

野菜をやっています。水田を使った複合経営です。野菜、果樹のほかに施設園芸も入ってきて、花卉も盛んになっています。とくにアールストロメリアは日本一の生産量を誇っています。トルコギキョウと合わせて、一五億円ぐらいの販売高があります。

地域に根ざしたJAづくり

石田 堆肥も入れてくれて八万円もらえればいいですね。

御子柴 上伊那の農業者はほとんど兼業農家です。一万七〇〇〇の正組合員ですが、専業率は一割弱です。水田作の専業農家は一割の中のみ一割あるかないかぐらいです。今、水田農家のほとんどが

稲作に関しては兼業地帯ということもあって、カントリーエレベーターの利用が進んできました。これまで九機動かしてきましたが、更新時期を迎えたことから七機に集約しています。

石田 行政を越えた集約ですね。御子柴 ええ。土壌がよい、技術

人にも「ふるさと」はあるが国は

を中心に地域農業が発展してきました。それが転じて、今は水田のほうへと移ってきました。

石田 お蚕さんの桑畑を開田して水田が増えた？

御子柴 ええ。伊那谷の西側に幹線水路が走るようになって開田が進みました。東側は三峰川の「川下り米」といって、全国一うまい米だと言われてきました。南アルプスから出てくる渓流水がミネラル豊富だということで、高い評価を得ています。

石田 米と繭の他に畜産も広がっているのでは？

御子柴 酪農家が多いですね。今も六〇、七〇戸ぐらいあります。大小入れて。ですから、耕畜連携を進めやすい地域ではあります。

石田 今度は、飼料用米で連携が取れるというわけですね。

御子柴 取ろうと思えば取れますが、飼料用米の使い方がまだ明確になっていません。しかし、ホールクroppサイレイジ(WCS)は

もある、施設も整備されているというところで市場から高い評価を得ています。収量も一〇俵取るのは当たり前。食味もよいので、コン

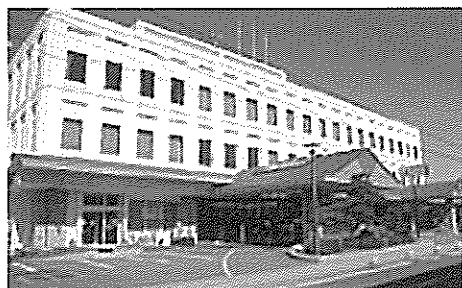
御子柴 組合員には、「こういってお米じゃなきゃ売れませんよ」というマーケットインの世界でやっています。営農指導も地域のリーダーと一緒にやってやっています。

この基礎は集落にあります。上伊那だけではないけれど、われわれは移動民族ではなくて定着民族なんです。よく言うのは、日本人には「ふるさと」はあるが国は

御子柴 わたしは伊那の出身ですが、そこでは南箕輪、高遠、長谷

で張り合う意識が強い。それに辰野や箕輪も一緒になって、同じように張り合っている。ただ張り合っているが、みんなで渡れば怖くない、みんなで一緒にやろうよという結集力もあります。

一方、伊南は宮田にしても、飯島にしても集落営農の発祥の地で



産物マスコットキャラクター
カミーちゃん

JA上伊那

組織の概況(平成26年2月末日)

組合員数.....28,548人
.....(正組合員16,839人、
.....准組合員11,709人)
役員数.....41人(うち常勤5人)
職員数...1,018人(うち正職員586人)

地域と農業の概況

長野県の南部、中央アルプスと南アルプスの囲まれた伊那谷にある。標高が480~1,200mの高低差がある内陸性気候で、良質の水を生かし、米、野菜(アスパラガス、スイートコーンなど)、リンゴ、ナシ、キノコ、花卉(アールストロメリア=日本一の生産量)、酪農などが盛ん。明治時代の蚕糸組合から伝わる農協運動が根づいている。

JAのデータ(平成26年2月末日)

設立 平成8年6月1日
本所所在地 〒396-8510長野県伊那市狐島4291
出資金.....83億円
販売品販売額.....154億円
購買品供給額.....166億円
貯金残高.....2,418億円
貸出残高.....685億円
長期共済保有高.....1兆2,225億円



みこしば・しげき

昭和25年生まれ。昭和48年亜細亜大学卒業後、伊那農協入組。上伊那農協協農部米穀課長、営農部次長、伊那支所長、総務企画部長を経て、同常務理事、平成24年同代表理事組合長に就任。26年全国農協カンントリーエレベーター協議会会長。家族とともに米、リンゴを経営する。

すよね。だから、集落のまとまりはあるのですが、反対にそのまとまりが強すぎて、外に出るとちょっと弱くなる。一人一人の思いは違いますが、集落ではしょうがないなという形です。まとまっている、そんな違いがあるように思います。

石田 藩は違いますか？

御子柴 藩は一緒で、高遠藩です。言ってみれば、ここは「陸の孤島」で交通の便が悪い。来てみるとわかりますが、鉄道がダメで中央高速ができてやっと開けました。

石田 そういう条件の悪さが、協同心を育んだのではないですか。

御子柴 「陸の孤島」というなかで、ここだけで完結するような地域経済を作りましょう、それも農工商一体となった地域づくりをしましょうと呼びかけてきました。

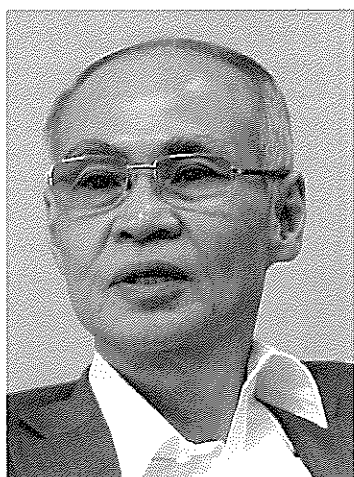
われわれは農業の担い手ではなくて、地域の担い手だという考え方をしています。八行政の首長たちにも同調してもらっています。集落へ行ってもどこへ行っても、

地域に定着しているのは農家の皆さんですからね。

石田 地域社会を作っているのは農民たちだということですね。

御子柴 商工会のみなさんもやっぱりそうかと、今、気づきはじめています。大型店の進出が相次ぐようになって気づいたようです。

農と商工とが一体となって地域づくりをしましょう、というコンセンサスが醸成されています。要するに、農協法という零細農家を守る法律によって、地域が守られている。われわれはそんなに意識はしていませんが、全国の話を知っていると、なんだ、そんなことまだやっていないのかという思いにかられます。支店協同活動なんかも、われわれは何年も前からやっています。支店（＝戦後新生農協）を核に組合員が集まる、というのはいわゆるDNAの一部なのです。農地の中間管理事業もそうですよ。ああいうものは行政ではなく、地域がやることです。



いしだ・まさあき

昭和23年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、農業政策学、協同組合論。現在、三重大学名誉教授・招へい教授、京都大学農学研究科（農林水産統計デジタルアーカイブ講座）研究員を併任。近著に『農協は地域に何が出来るか』（農文協）、『JAの歴史と私たちの役割』（家の光協会）など。

地域に任せればいい話です。全国的にみれば機構が必要かもしれないが、ここでは必要ないと言っています。

石田 自分たちで、すでにやっている。

御子柴 農地流動化円滑化事業もしっかりやっています。全国一位ぐらの流動化率を誇っています。

組合員の信頼を得るために

御子柴 今回のJA改革で六次産業化が取り上げられていますが、誰のための六次化かという議論が欠けています。加工、販売、流通を二次、三次産業の皆さんが握っている現状では、そっちのほうへ収益が動くだけではないのか。そ

耕地の管理だけならば誰でもできる。しかし、畦畔の管理は誰がするの。土手草は荒れるわ、道路は荒れるわ、水路は荒れるわでは意味ないでしょ、ということですよ。やっぱり集落営農なり、地域の皆さんが、日曜日にも出て来て、みんな管理するようなスタイルをとらなくてはなりません。

の結末は今の農産物と同じことで、仮に原価供給が可能であっても、原料供給者の立場から抜け切れるものはありません。

全部一貫してJAが担えばいいが、連合会を見渡したって、そんな力はどこにもない。作るまで

われわれは農業の担い手ではなく、地域の担い手だ

伊那谷は南北に走る天竜川に数多くの河川が東西に流れ込んでいる。人の日常的な動きも天竜川沿いに集まってくる。そこに行政区とJAの拠点が形成される。12の総合支所があるが、合併以前からそこが組合員の拠点。本所にはめったに行かない。だから、JA上伊那の「支所活動」は、支店協同活動が強く言われる以前から活発に展開されてきた。

支所にはJAらしさが溢れ、活気に満ちている。組合員の笑顔がみえる。支所まつりも盛大に開かれる。CS、ESも積極的に取り組まれている。

上伊那では、古くから農を軸に地域社会建設の槌音が高らかに鳴り響いていたが、今も健在のようだ。「われわれは農業の担い手ではなく、地域の担い手だ」の一言がそのことを表している。（石田正昭）

門の大賞（全中会長賞）をお取りになりました。ここがモデル地区だという位置づけですね。

御子柴 モデル地区かもしれないが、全国版にはならないですよ。

この地域に合ったJA運動を、ガチッとやっていると、これが東伊那だけです。しかし、これが東北へ行ってもそのまま実践できるのかという絶対にはできません。地域が全然違いますから。

画一的な農政は意味がありません。農水省は財務省から予算を取ったら、その後は県なり地方、地域に任せて、地域の特徴に合った政策をとらなければ、地域は確実に元氣になります。

中央集権的な発想でやって行くって、うちとしては合わないものがあると思います。しかし、うち

として取り組めるものは何かを見定めながら、取り組んできました。その結果、今までの政策の取り入れ率は県下第一位だし、全国的にも高い位置にあります。それが、評価されたのだと思います。

石田 例えばどんなことですか。

御子柴 例えば産地づくり交付金で、集落営農でなければ受けられないとなると、その形を作り、今もきちっとやっています。ナラシの交付金加入率についても全国では三〇何%とか言っていますが、うちは七〇%という高率を達成しています。国の政策に合わせてやっていますが、組合員には地域の現状に合わせる形で説明することによって、政策の浸透を図っているのです。そのことがJAへの信頼にもつながっています。

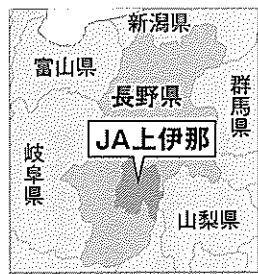
画一的な農政を改めることが、本当の規制改革だと思えますよ。創意工夫でコストを回収できる農業にしていかなければなりません。（以下、次号につづく）



【第2回ゲスト】
御子柴茂樹氏
長野県JA上伊那代表理事組合長

「インタビューとまとめ」
石田正昭 龍谷大学農学部教授

龍水社という蘭系販売連合会を中心に各地の養蚕組合が結集してできたのが現在のJA上伊那。その結集力は今もすばらしい。農を基盤に地域とくらしに貢献する協同組合をめざしている。地域協同組合としてのその姿はまさにオンリーワンのJAと評価できる。



農を基盤とせよ、 協同の力を発揮しよう

願いは地域協同組合

石田 ぐらしの分野ではコンビニを経営していますね。
御子柴 これまでJA上伊那は、支所にワンストップで、生活店舗とSS、資材店舗、金融店舗を持つていました。Aコープもレ

隣のJAみなみ信州が導入しました。それに合わせてわれわれもファミリーマートの出店を決めました。ファミマ側も長野県にはお店がなかったので、提携先として非常に魅力的だったようです。われわれの要望をすいぶん聞いてくれました。直売所機能もあり、A

がなければ組合運営は成り立ちません。

二つのガバナンスをバランスさせながら、農を基盤に地域に貢献する協同組合を作ることが事業展開の基本です。地域とともに生きて、地域の皆さんにどういうサービスができるのかという部分と、農業に対する投資をどのように確保するのかがという部分から成り立っています。

伊那の農産物、特産物を置きたい。お土産に買ってほしい。お土産に買ってほしい。

生き生きとした組織活動

石田 地域を守り、育て、そして地域に育てられるというイメージですね。

JAの希望としては、東京からのバス停前に出したい。そこで上

石田 女性が組織ですが、フレミズ、ミドルミズ、ナイスミドルという層別組織と生活班という機能組織とがありますね。

石田 誰が子どもを預かっているのですか？

御子柴 もちろんです。地域を守るうえで、農を基盤にやっていくのがわれわれで、商工を基盤にやっていくのが商工会。今、その商工会から「ファミマ」を駅前商店街にも作ってくれ、という話が来ています。

フレミズのみなさんも子連れでも来られるというので、非常に喜んでいきます。毎月開講のフレミズ大

御子柴 毎年十二月に「女性まつり・家の光大会」がありますが、いつも一〇〇人くらい集まります。会場がいっぱいになります。フレミズのみなさんも子連れでも来られるというので、非常に喜んでいきます。毎月開講のフレミズ大

御子柴 そうです。地域になくはないJAでなければなりません。

学でも託児所を作っています。

全体が保育園みたいになります。それがひと段落すると、夜はミドルミズの大学になります。ナイスミドルの大学はフレミズ大学があるのなら、わたしたちにも大学をということが始まりました。



農産物マスコットキャラクター
カミーちゃん



JA上伊那

組織の概況(平成26年2月末日)

組合員数.....28,548人
.....(正組合員16,839人、
.....准組合員11,709人)
役員数.....41人(うち常勤5人)
職員数...1,018人(うち正職員586人)

地域と農業の概況

長野県の南部、中央アルプスと南アルプスに囲まれた伊那谷にある。標高が480~1,200mの高低差がある内陸性気候で、良質の水を生かし、米、野菜(アスパラガス、スイートコーンなど)、リンゴ、ナシ、キノコ、花卉(アルストロメリア=日本一の生産量)、酪農などが盛ん。明治時代の蚕糸組合から伝わる農協運動が根づいている。

JAのデータ(平成26年2月末日)

設立.....平成8年6月1日
本所所在地.....〒396-8510長野県伊那市狐島4291
出資金.....83億円
販売品販売額.....154億円
購買品供給額.....166億円
貯金残高.....2,418億円
貸出残高.....685億円
長期共済保有高.....1兆2,225億円

その他にジュニア対策として小学校三年から六年までのあぐりスクールもやっています。参加者は

一般募集ですが、保護者の方には組織基盤強化の意味もあって、ぜひJAに入ってもらいたい、という話をしています。

石田 それともう一つ。年金受給者も多いですよ。

御子柴 ええ。二万人を超えて、今、一三〇億円ぐらい。

石田 それはすごい。

御子柴 マレット(ゴルフ)をやったり、ゴルフをやったり、旅行に行ったり、いろいろな部分で仕掛けをしています。年金受給者になると、やっぱり仲間が欲しくなります。集落の中で、年金友の会のマレットがあつて出て行くけれど、俺には誘いが来ないという話になって、年金口座の指定替えをする人が出てきます。口コミもけっこう大きいですよ。

石田 口コミね。お年寄りの口コミは大きい。

御子柴 そういう皆さんが今度は年金友の会の旅行があるけれど、仲間内の旅行はそれを利用しよう

や、皆でワイワイやるのもいいじゃないかという話になります。関係性が拡大するわけですね。

石田 JAの企画旅行だけど、一本で動かない。

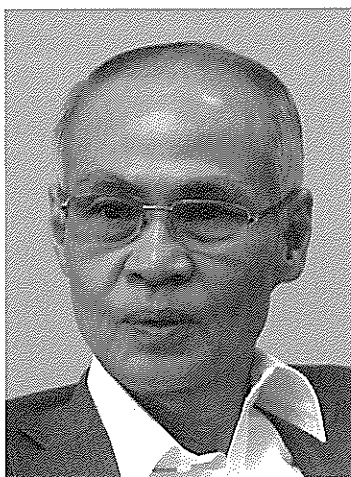
御子柴 支所単位です。一二の総合支所があり、以前は一元化したのですが、今はまた地域へ戻して、支所機能の充実のなかでやっています。

要するにもう一回、旧のJA単位に戻し、それぞれが特色を持った事業展開をしています。権限移譲も積極的に進めながら、支所長を育てるようにしています。

昔の組合長並みのリーダーシップを持った地区理事と指導力を持った支所長を作りたいのです。とくに地区理事さんの活躍に期待

しています。組合員との間で地区の課題をきちんと議論し行動してほしい。そうすれば、おのずと支所活動が豊かになるし、事業活動も活発化します。

石田 なるほど。そうであれば、



いしだまさあき

昭和23年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、農業政策学、協同組合論。三重大学教授を経て、本年4月より龍谷大学農学部教授。京都大学農学研究科(農林水産統計デジタルアーカイブ講座)研究員を併任。近著に『農協は地域に何ができるか』(農文協)、『JAの歴史と私たちの役割』(家の光協会)など。

年金友の会やその他の活動もス

決め手は教育研修

石田 ところで、金融、共済、営農という縦割りの事業組織は、うまくいっていますか？

御子柴 今、いちばんそこが問題になっています。昔の農協職員はなんでもやりましたが、今はプロ化しています。連合会からの縦割りがきつちり入って、農を知らない職員がいっぱいいる。

そこで、うちではJA菜園という子会社を作って、そこで農業研修をさせています。職場離脱という形で、年に二日。

石田 年に二日だけ？

御子柴 職場離脱は一週間ありま

ムーズに展開できるわけですね。

ですが、他部門への業務もあるので、二日だけです。JA菜園では農作業をやって、汗水たらして組合員の思いを感じ取ってほしいのです。JA菜園は、新規就農者を育てる役割も担っています。研修生たちはJA菜園だけではなく、花卉や野菜など専業農業者のもとで学んでいます。費用は行政と折半ですが、JA職員として研修させます。

研修生たちには月一三万円を支給します。研修を終えると、今度は農地の斡旋(あつかん)に入ります。後継者のいない農場や施設があるので、そこへ入ってもらい、できるだけ

JAには固有の歴史がある



農業者が地域の担い手だという意味は、農業者が何代も続く「定住者」だということに由来する。定住者は、転勤族とは違って、地域の資源、文化、社会を守り伝えている。

JA上伊那も、地域になくてはならない存在だ。金融店舗のみならず、Aコープ、直売所、コンビニ、農村レストラン、SS、オートパル、冠婚葬祭など多彩な事業を展開している。その中に特徴的な事業として「龍水呉服」がある。

今どき呉服販売を続けているのか、という思いに駆られたが、聞けばそこには良質な生糸を作って販売するという「龍水社」の精神が受け継がれていた。呉服販売を通じて、本物の着物のよさを地域の皆さんに提案したいという思いが宿っている。

JA上伊那の歴史と伝統を守るため「龍水呉服」を続けていってもらいたい。(石田正昭)

ますから。チェックは、例えば、部署別の朝礼で今朝の新聞ニュースを含めて、意見を発表させるようにしています。『家の光』や『日本農業新聞』に限りませんが、毎朝、一人ずつ気になったニュースとか、おもしろかった記事とか、なんでもよいからしゃべれ、と。しゃべることによって、考える力を養う機会にもなりますからね。

わがJAは教育研修に力を入れています。専門職の技術員(営農指導員)の能力向上のために、滋賀県の種子会社の学園に一年間、派遣職員として研修に出します。また、全農長野県本部の名古屋事務所と県営農センターにも、二名の職員を派遣しています。市場環境の勉強は、JAに帰ってきてから大いに役立ちます。

これからの課題は出荷市場を拡大するのではなく、集約することだと考えています。(終・取材 平成二十六年十一月二十八日)



組合長

みこしばしげき

昭和25年生まれ。昭和48年亜細亜大学卒業後、伊那農協入組。上伊那農協営農部米穀課長、営農部次長、伊那支所長、総務企画部長を経て、同常務理事、平成24年同代表理事組合長に就任。26年全国農協カントリーエレベーター協議会会長。家族とともに米、リンゴを経営する。

所別にやっています。支所の自主

性に任せて、支所長のアイデアでやれと指示しています。行政と組んだりしていますが、いかに地域に密着させるかがポイントです。

あぐりスクール生には『ちやぐりん』を渡して、読ませるようにしています。そうするとリピーターが一割くらい出てきます。次の子どもたちがそれを見て、僕もやりたいと言ってきます。それで読む。JA上伊那では、けっこう『ちやぐりん』が出ていますよ。

石田 『家の光』や『日本農業新聞』は、どう生かすかが重要ですよ。御子柴 職員には全頁読ませています。読んでいるかどうかをきちっとチェックします。それによつて教育研修助成金を出してい